



0) 準備：「同じ」とは何か

数学の魅力の一つに物事の意味を厳密に定義していく事があると思います。「同じである」とはどういう事か、「無限」とは何か、「真っ直ぐ」とはどういう事か・・・

「自己＝愛＝運命」論を展開する前に「同じである」とはどういう事かを数学がどう考えているか見ておきます。

「何か」と「何か」が「同じである」というのは、その「何か」と「何か」の間の「関係」を言っています。その「関係」に次の三つの性質があるとき、その「関係」は「同じである」事を示していると数学は言います。

1) 「何か」 a は自分とその関係 (Relation)を持つ (aRa)：反射律

2) 「何か」 a が「何か」 b とその関係を持つならば、 b も a とその関係を持っている (aRb ならば bRa)：対称律

3) 「何か」 a が「何か」 b とその関係を持ち、かつ b が別の「何か」 c とその関係を持つならば、 a と c もその関係を持っている (aRb かつ bRc ならば aRc)：推移律

反射律、対称律、推移律の三つを総称して同値律と言います。

たとえば、「平行である」という関係は

1) ある直線は自分自身と平行である。(反射律)

2) 直線 a と直線 b が平行なら、 b と a は平行である。(対称律)

3) 直線 a と直線 b が平行で、かつ直線 b と直線 c が平行なら、 a と c も平行である。(推移律)

が成立します。だから「平行である」という関係は「同じである」という性質を持ちます。何が同じかと言えば「方向」が同じな訳ですね。

図形の「相似である」というのもこの三つの性質を持っています。この場合何が同じか、と言えば「形」が同じだ、という訳です。

二つの数字を比較する「以下である。(\leq)」という関係は反射律と推移律は成立しますが、対称律が成立しないから、「同じである」という性質がありません。当然ですが。

「3親等以内の親族である。」という関係は反射律と対称律は成立しますが、推移律が成立しません。だから「同じである」という性質はありません。親戚、というのは「同じ」なようで「同じ」ではないのです。

実は「愛」というのがこの三つの性質・同値律を満たすのではないか、という発想が「自己＝愛＝運命」論の基本にあります。

1) 「自分」とは何か：肉体か精神か

小学校の高学年の頃だったと思います。夜寝床に着くたびに恐ろしくて涙が出てしようがありませんでした。母は「誰かと喧嘩でもしたのか？」と心配しましたが、実は「死ぬ」事が怖くて仕方がなかったのです。死んだらどうなるんだろう。もう永遠に生き返る事ができない。世の中で何が起きようと、もう二度とそれを経験することが出来ないんだ。千年、一万年、一億年・・・地球がなくなっても僕は二度と自分であることが出来ない。「無限の時」という概念が怖くて怖くて、涙が出てしようがありませんでした。

その想いは長ずるに従って「自分」って要するに何なんだろう、という風に形を変えていきました。肉体の自分は滅んでも靈魂は永遠に生きるんだ、というような事は信じられませんでした。どう考えたって自分は肉体ではないか。肉体の中にこそ自分がいる。頬をつねって「痛い」と感じるからこそ自分がいるのではないか。

痛みを感じる部分こそが自分だ、という考えはしかし爪とか髪の毛の事を考えると納得できない。糞尿や唾や涙もついさっきまで自分の一部だったのに、一体いつの時点で自分でなくなったのだろう？そもそも自分という肉体を物理学的化学的に見れば細胞の集まりで、細胞はタンパク質のかたまり、究極的には炭素や水素や酸素の集まりである。細胞は日々刻々と新陳代謝を繰り返し、昨日まで自分の一部を構成していた細胞は垢となったり汗となったりして外部に排出されている。逆に昨日まで豚の一部を構成していたタンパク質がカツ丼となって今日は自分の一部になっているかも知れない。物質的にみたら自分と豚の間に境界などないのだ。

自分とはこの肉体だというのは川の流にザルをいれて「このザルの中の水は俺のものだ」と叫んでいるに等しい。中の水は刻々と入れ替わっている。ザルの目が詰まって、水の入れ替わりがなくなった時、新陳代謝がなくなった時それが自分の死を意味する。つまり自分の肉体がそれ以外との境界を明確に特定された時点が自分の死なのである・・・

自分とは何かを唯物論的に理解しようとする僕の試みは挫折しました。しかしかといって自分とは心だなどと科学的に論拠のない事を信じる気にはなれません。心の動きといっても結局は脳の中で起きている化学変化にその根拠があり、脳の化学変化を担っているのは物質なのであります。

そんな事をあれこれ思ううちに最終的に得た結論は、自分とは自分を取り巻く出来事の総称だ、という事でした。いま目の前にパソコンがあってそのキーボードに手を置いている。横には電気スタンドがあり手元を照らしていてそのすぐ横にウィスキーグラスがある。このグラスの中にはもうすぐ自分の細胞の一部になるはずの炭水化物を含んだ液体が入っている。こういう状況が自分なんだ、と。生まれて死ぬまでの何年間かは、ある強い秩序が

存在して炭素や水素酸素の関係を強力に定義するが、その秩序が崩れるとそうした元素はまた宇宙に拡散していく。ある何年間か自分の肉体を入れ替わり構成した原子分子はまた別の秩序に組み込まれていく。死んで原子分子が拡散していくことも含めて、そういう一連の出来事こそが自分なんだ。これが今僕が思っている自分の定義です。

2) 愛とは何か : 「大好き」と「愛してる」の違い

「大好き」と「愛してる」の違いはどこにあると思われますか？

意外と簡単にその違いは説明でき、おそらく皆様も同意していただけるのではないかと思っています。

好きと愛の対象を異性から別のものにしてみましょう。たとえば国です。好きな国、嫌いな国、というアンケートがよく行われます。好きな国の上位はアメリカだったりスイスだったりします。しかし、ですよ。愛している国、というアンケートを見かけた事はありません。何故か。愛しているのは日本に決まっているからです。日本人なら愛の対象は日本国に決まっている。もちろん愛国心なんてない、という人もいるでしょう。日本国を愛していないという日本人もいるでしょう。でも日本人が他の国を愛する、というのはちょっと異常に聞こえます。

人と国の関係を考えると、好き嫌いは別にして自分の国を愛している、というのが普通にも思えます。この事が「好き」と「愛す」の違いを一番よく示しているではありませんか。つまり「好き」とはその対象に価値を見だし、それにプラスの評価をしている、という意味であり、「愛す」というのは自分とその対象の同一性ないし自分がその対象の一部であるという状態だ、と言えるのではないのでしょうか。

異性を対象とした場合、相手の中に美しさ、賢さ、快活さなどある価値を見だしそれを好ましいと思う気持ちと、その価値を自分の中に取り込みたい、一体になりたい、という想いが似通っているので「好き」と「愛」との区別がつきにくくなっているのです。

「好き」とは価値にその根元があり、「愛」は存在・関係にその根元がある。

だから僕は思います。「愛」の最も純粋な形は「自己愛」である、と。自分が自分を思う気持ち、それが一番純粋な愛の形です。自分には価値はない。頭も悪いし、姿形も良くないし、勇気もなければ性格も悪い。自分は自分が大嫌いだ。自分は好きでこの自分になった訳ではない。でもやはり自分は自分を一番大事に思うし、自分はどうしようもなく自分でしかあり得ない。自己嫌悪すらも自己愛の一種の形態である、と思うのです。

このことから出発して考え出したのが愛に関する矢澤の法則です。

愛に関する矢澤の法則

第一法則：自己愛こそが愛の最も純粋な形である。a 愛 a。反射律

第二法則：愛する事と愛し合う事は同義である。a 愛 b ならば b 愛 a。対称律

第三法則：愛は伝播する。a 愛 b かつ b 愛 c ならば a 愛 c。推移律

第一法則はすでに説明しました。第二法則については「愛」が一方からの感情・評価ではなく両者の関係に基づいている以上成立するはずです。

第三法則は未だ仮説段階ですが、この法則を利用した現象がよく見られると思っています。一つは政治家が内政に失敗したとき外交で点を稼ごうとする事です。外に敵を作ってその敵との差異をもって内部団結を図ろうとする。まさに愛（同じ国の国民ではないか）による団結です。

スポーツ界にも例があります。サッカーのJリーグがスタートするとき川淵チェアマンは地元密着型のチーム作りに拘りました。これは大成功だったと思います。「好き」を基盤とした支援者層ではなく、「愛」を基盤とした支持層の形成に成功したからです。自分は埼玉に住んでいるから浦和レッズを応援する。浦和レッズが強いからカッコいいから支持するわけじゃない、というファンを獲得した。事実レッズがJ2に降格した時もファンは離れませんでした。これと逆に「好き」を基盤とした支持層を作ったのがプロ野球だと思います。巨人ファンは巨人が強いから（巨人の持つ価値に）ファンになっているのです。アンチ巨人も巨人に対抗するという立場・一種の価値にその支持理由がある。

3) 運命とは何か：愛は何が同じ事なのか

第三法則は未だ仮説ながら、僕は愛が同値律を満たしているのではないかと考えています。では愛は何が同じだというのか。それは運命だ、と思います。運命を同じくすること、それが愛なのだ、と。幸福を同じくすること、と言ってもいいかも知れない。

戦争の時国民は運命共同体になります。それが愛国心です。愛し合う二人は結婚によって運命共同体になります。

そして、運命とは自分を取り巻く一連の出来事、つまり1)で申し上げた様に自分そのものです。

自己愛を最も純粋な形として愛は自己から発せられ、愛の及ぶ範囲を自己とする。自己とは愛の及ぶ範囲であり、愛で運命を共有する範囲である。愛で幸福を共有する範囲である。

根を共有しているタケノコの地上に出ている一本が肉体としての自分であり、それは愛という根でつながっている一つの共同体の一部なのではないか。

4) 幸福論への序章

自分が幸福なとき自分は幸福だ。(反射律) これは当たり前。

自分が愛する人が幸福なとき自分は幸福だ。そして自分が幸福なとき我が愛する人も幸福になってくれる。(対称律)

自分と幸福感を共有する人が、別の第三者と幸福感を共有するとき、自分とその第三者も幸福感を共有できる。(推移律)

この幸福感の共有こそが愛の本質ではないか。

幸福とは変化である、と僕は思っている。幸福には揮発性があり幸福はじっとしていない。幸福波というものが存在するのではないか。電磁波がその変化で電磁誘導する様に、幸福波も共鳴する。幸福波の共鳴として愛をとらえるとどんな事が判明するのだろうか？？？

参考：漢字の成り立ちに見る字義（漢字源：学研より）

「自」：人の鼻を描いたもの。「私が」というとき、鼻を指さすので自分の意に転用された。

「己」：己は古代の土器の模様の一部で、屈曲して目立つ目印の形を描いたもの。はっと注意を呼び起こす意を含む。人から呼ばれてはっと起立する者の意から、おのれを意味することになった。

「愛」：「心+■（処の左部分=足をひきずる）+音符（既の右部分）」で心がせつなく詰まって、足もそぞろに進まないさま。

「好」：「女+子」で女性が子供を大切にかばってかわいがるさまを示す。

「命」：「■（命の上の部分=あつめる）+人+口」人々を集めて口で意向を表明し伝えるさまを示す。特に神や君主が意向を表明すること。

「運」：「軍（運の右側）」は戦車でまるく取り巻いた陣だて。運とは「■（しんにゅうの元の形=足の動作）+音符（軍=めぐる）」でぐるぐるとまわること。

巨人の新ファンサービスをアピールする原監督

G党の背に戦士の誇り

読売巨人軍は14日、読売新聞社、日本テレビと共同で「GIANTS PRIDE PROJECT」(GPP)を発足させた。チームとファンの絆をより深めるため、年間を通して様々なプロジェクトを展開する。

第一弾は「あなたが巨人の新戦力。I am GIANTS 2006」として、2月1日にスタート。今季から巨人選手が着用する新ユニホームと同じ仕様のユニホーム

に、ファンの名前と600、9000番までの自分だけの背番号を入れて販売(予定価格2万5000円)し、チームと一体感を持って応援してもらうという試み。

清武英利球団代表は「選手と同様にファンの方にも一つしかない背番号を背負って球場に足を運んでもらい、選手と同じ気持ちで戦ってもらえれば」と狙いを説明。原辰徳監督は「選手は自分の背番号に強い愛着を持っている。ファンの皆さんも『ジャイアンツ愛』を持って、ともにスクラムを組んで戦ってくれると思う」と期待を寄せた。

背番号200～9999 ファンに

(06.01.09)

06年1月15日読売新聞

読売巨人軍がファンに背番号をプレゼントし、チームとの一体感を持ってもらう戦略を取ったとの事。「ジャイアンツ愛」作戦とも言うべきこの処置。巨人も「好き」ベースのファン作りから「愛」ベースのファン作りへ戦略転換したというべきか。

(06.01.15)